ラブライブ！+フォース
～病める時も側に～

愚民グミ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「想いを通じ合わせるより、素晴らしいことがある」

些細なことから、穂乃果への恋愛感情に気付いてしまった海未、そして海未の思いに気付いたことりとμ’ｓのマネージャーをする剣持　真琴（けんもち　まこと）。ことりは、真琴に穂乃果と海未をくっつける計画を持ち込むが……。

ちょっと鈍感な穂乃果と、ヤンデレほのキチなことうみが穂乃果を取り合い、オリ主が刺されたり突き落とされたり薬を盛られたりしながら二人の仲裁に入るというお話。

※これはラブライブ！の二次創作です。しかもヤンデレ百合小説です。カップリングはこと↓ほの↑うみです。アンチ・ヘイトはキャラ崩壊の可能性があるため一応付け

ました。苦手な方は注意してください。
※オリキャラが多数出てきます。また、男オリ主もいますが、ただの被害担当です。
※作者は百合小説は不慣れなので、演出などが出来てないかもしれません。ご指摘ありましたら、お願いします。
※不定期更新です

目次

第1話「序章～Prologue～」 1
第2話「発覚～Perception～」 16
第3話「塔～Tower～」 32
第4話「笑顔～Expression～」 50

第1話「序章～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～」

「……むー……」

「……どうした穂乃果？珍しく浮かない顔して」

時刻は12時半を少し過ぎた辺り。昼休みも半ばに入って、校内で生徒達が思い思いの過ごし方をしていた。

ここ生徒会室で、机に突っ伏して唸っているのは現・生徒会長にして我らがスクールアイドル・μ’ｓのリーダーの穂乃果だった。

俺こと、μ’ｓのマネージャーの剣持　真琴は、用務員さんと手分けして冬に備えてストーブの点検のために生徒会室に立ち寄ると、穂乃果がずっとそんな感じでいたのでつい声をかけた。

「……あ、まこくん。どうしたの？また頼まれ事？」

「ああ、用務員さんに頼まれてさ、ストーブの点検手伝ってるんだ」

「あはは、相変わらずだねー」

「お前は珍しいな、一人で生徒会室にいるなんて」

「さっきまで海未ちゃんとことりちゃんもいたんだよ。私だけちょっと書類の確認とか

してたんだ」

そんな風に笑っているが、やはりどこかいつもの溌剌とした元気がなかった。

「……本当に何かあったか？海未達みたいにはいかないかもしれないけど、何かあるなら言ってみろよ」

「うーん……」

そう言うと、穂乃果にしては珍しく悩んだ表情をみせる。言いにくいことなのか？

「……えっとね？大したことじゃないんだけど、何て言うか、最近海未ちゃんに避けられてるっていうか……」

「お前……また怒られるようなことを……」

「ち、違うよ！今回はそうじゃないもん！……多分、きっと……」

若干自信無さげなのは普段が普段だからか。心当たりが多いって顔をしているな。

けど、海未は確かによく穂乃果を叱っていることが多いから勘違いされやすいが、海未は何だかんだ言ってことりと同じくらい穂乃果に甘い。叱ったり怒ったりすることはあるが、大体二言目には「仕方ありませんね」とか言って許してしまう。

最もそれはμ’s全体に言えることで、何かと厳しい元・風紀委員長の歩さんですら、最近は大体のことを許容している。

「それに、何だか変なんだ、海未ちゃん。よそよそしいっていうか、いっつも予定がある

んだって」
「予定？……具体的にどんな感じで避けられてるんだ？」
「えっと……」
☆☆☆☆☆☆☆☆★★★
「海未ちゃん、今日練習終わったら一緒に帰ろー！」
「！す、すすすみません穂乃果！わ、私、家の用事があるので！」（ピュー！）
「海未ちゃーん！駅前に新しいクレープ屋さんが出来たんだって！一緒に行こう！」
「すいません！き、弓道の練習があるので！ごめんなさい！」（ピュー！）
「うーみーちゃーん！ねぇねぇ、一緒にカラオケ行こう！ライブ前に二人で練習しようよ」
「ご、ごめんなさい！今日は、日舞の稽古があるんですー！」（ダダダダダ！）
☆☆☆☆☆☆☆☆★★★
「……あからさまに変だな」
「ね！やっぱり変だよね！」
ガタッ！と身を乗り出す穂乃果。どうやらかなり鬱憤が溜まっているらしい。まぁ、親友からそんな態度とられたら、そりゃ凹むよな。……まあ、俺の悪友達の場合は微塵もそんなこと感じないけど。

　正直、海未の反応はおかしすぎる。確かにあいつは弓道部に日舞の稽古にとスクールアイドル以外にも色々掛け持ちなのは分かるが、それにしたってあいつが穂乃果の誘いを断るなんて、これは明日は矢でも降るんじゃないか？
「海未ちゃん、何か悩み事でもあるのかなぁ。困ったこととかあるんなら言ってくれれば良いのに……そんなに頼りないかなぁ」
　ぶぅ、と頬を可愛らしく膨らませる穂乃果。どうやら相談されないことがかなり気に入らないらしい。確かに、ことりの留学事件みたいなこともある。悩みを一人で抱え込んだところで、解決策は見つからないだろう。なのにこいつらはそういった悩みをお互いに打ち明けられないらしい。悩みを一人で抱え込むのは、この３人の共通の悪い癖らしい。
「……よし、分かった。なら俺が海未に話聞いてみるよ」
「え？いいの？」
「ああ、お前らには相談しにくいことでも、第三者になら話やすいだろ？それに、俺はお前らのマネージャーだからな。相談に乗るのも、マネージャーの仕事だ」
　ライブ前に少しでも懸念事項を減らすのはマネージャーとしては当然のことだ。
　今日は確か弓道部の練習に行くって言ってたな。放課後、会いに行ってみるか。
☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★

【ｓｉｄｅ：海未】

ふう、と一つ、息を吐きだし、酸素を再度吸い込むのと同時に、矢を番えて弓の弦を引き絞る。視界が一点、的の中央へと集中し、狭まっていくのを感じる。周囲の音は完全に自分の中から消え去り、集中はただ一点へ、弦とともにキリキリと張り詰めていく。限界まで引き絞られた弦と集中力。脳裏に必中の未来が思い浮かぶ。

確実に当たる。その確信を持って、弦を……。

『海未ちゃん！』

「ッ!!!!」

ダンッ！

必中の意思を持って放たれた筈の矢は、しかし予想とはまったく異なり、的から大きく外れて壁に突き刺さる。

「……うううううう!!」

未熟！ああ、なんてことでしょう！これでもう今日１０回目です！思わず崩れ落ちる私を、他の部員が心配して声を掛けてきてくれますが、まったく耳に入らない。

ここ最近、ずっとこの調子。何かに集中しようとするたびに、なぜかあの笑顔が思い浮かぶ。私の名前を呼ぶ声が頭の中で木霊する。そうなると、一瞬で私の頭は真っ白になり、心臓が早鐘を打つ。

私は、どうしてしまったのでしょう。……原因については心当たりがあります。全てはあの日から。あれから何をするにも集中できない。作詩にしても部活にしても稽古にしても、それは同じでした。

「……穂乃果」

穂乃果は今どうしているでしょうか？恐らく、次のライブに向けてダンスの練習中でしょうけど。

Ａ―ＲＩＺＥとの合同ライブのあと、ツバサさんからこんな提案がありました。

「今度は、音ノ木坂学園で一緒にライブしない？ラブライブのことは抜きで、私達の週末合同ライブを」

当然、私達μ’ｓはこれを承諾しました。理事長にも話を通して、二週間後の日曜日に、ライブを行うことになりました。……何故かツバサさんのことが苦手な真琴くんとあんじゅさんと何か因縁があるらしい歩さんは、最初嫌そうな顔をしていましたが。

「あれ？便利屋くんだ。いやー、この間は弓の手入れ手伝ってくれてありがとー。今日はどうしたの？また掃除の手伝いしてくれんの？」

「いや、今日は海未に用事があって。あ、でも掃除の手伝いやらせてもらいますよ？」

「いやいや、君がうちの道場に来るたんびにピカピカにしてもらってるから、今日はいいよ。丁度休憩にするところだったし、連れてって良いよ。なんか集中できないみたいだ

し」

ふと、部長と聞きなれた声が聞こえてきた。道場の入り口を見れば、手を上げている真琴くんの姿がありました。

「練習中に悪いな海未。ちょっと用事があったから寄らせてもらったんだ」

「真琴くん、どうかしたんですか？練習は？」

「練習は先生と歩さんに任せて、俺と麗で次のライブのステージの飾りとか、衣装の材料の買い出ししてきたところだよ。屋上に戻る前にお前に確認したいことがあってさ、麗に荷物預けてこっちによったんだ。別のとこで話せるか？」

「分かりました。ちょっと待っててください」

「よーし、１５分休憩！」

『『はい！』』

「……そうですか。真姫のほうは順調なのですね」

「ああ、凛と麗が五月蝿いみたいだけど、一年生で意見出し合いながら進めてるみたいだぜ」

「……」

私と真琴くんは場所を移して、中庭のベンチに腰かけている。昼休みなら生徒の憩

いの場になってるここも、部活で忙しい今の時間は誰もいません。遠くから部活の掛け声が響いて、より閑散とした雰囲気を感じます。

私は真琴くんが差し入れに持ってきたタッパーに入ったレモンの蜂蜜漬けを一切れ食べた。

レモンの爽やかな酸味と蜂蜜の柔らかい甘味が疲れた身体に染みます。

彼の作る差し入れはいつも手が込んでいて、弓道部の皆にも好評です。しかも、こだわりの一品なのか、この蜂蜜漬け一つとってもいつも味が違います。

「……その様子だと、まだまだ浮かばないって感じだな」

「うう、すみません……」

私は思わず俯いてしまう。本当に申し訳ない。真姫にもことりにも、μ's の皆にも。皆待っているのに。

……これでは合宿の時と同じです！ですが！うう、こんな悩み、誰に打ち明ければ!?

「……なんか悩み事か？難しい顔してるぞ。はい、お茶」

「あ、どうも。……そんなに分かりやすいですか？」

「鈍感な穂乃果まで心配するほどだぞ？そりゃ気づくって」

「穂乃果が？」

　お茶を受け取りながら、つい、穂乃果の名前に反応してしまった。真琴くんは、やっぱり、という感じの顔をしていた。……どうやら真琴くんにはお見通しのようですね。それどころか穂乃果にまで心配をさせてしまってるらしい……。
「穂乃果とかに言いにくい悩みなら、俺が代わりに聞くぞ？言うだけなら、大したことないだろ？」
「……ですが……」
「ずっと黙ってちゃ駄目だってこと、お前ならよく分かってるだろ？抱え込んだままってのも、良くないことだぞ。黙ってて欲しいなら、黙っててやるし」
　……確かに、彼は時々イタズラをする事は有りますが、口が固いところがあります。彼のそういったところは信頼に足ると感じます。
「……他の方に、言わないでくださいね？」
「ああ、勿論」
　深く頷く彼を見て、私は、ここ最近感じていたこと、そして、その発端を話すことにした。
「……きっかけは、数日ほど前からです……」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

その日は、偶々私と穂乃果以外の皆に用事があったらしく、練習が終わると皆早々に帰ってしまった。

私と穂乃果は新しい詩の構想について、幾らか話した後、二人だけで帰ることにしました。

「海未ちゃんと二人っきりで帰るなんてすっごく珍しいよねー」

「そうですね。最近は特にそうかもしれません」

実際、μ’sを結成してからは9人で、それに加えて麗くんやヒデコさん達が付いてくることがありました。

そうでなくても、私と穂乃果とことりの3人で帰るのが基本になっていました。だから、穂乃果と一緒に、二人きりで帰るのは本当に珍しいことでした。

最初は、世間話をしながら普通に歩いていました。けど、何故でしょう。普段なら他の人も交じる会話が二人だけだからか、次第に私は、本当に二人だけの世界にいるような、そんな不思議な感覚に陥っていました。

「海未ちゃん見てみて！もう葉っぱが黄色くなってきてる！秋だねー」

「最近、寒くなってきましたしね。そろそろ紅葉の時期ですね」

ふと、並木道を歩いているとき、穂乃果がそう言いながら立ち並ぶ木々を見上げて呟きました。私も見上げると、ついこの間まで青々とした葉を繁らせた木々は、少しず

つ秋の色をその葉に混ぜ始めていました。

「ふふ、なんかこうして二人で眺めるのも風流だよね」

そう言った穂乃果を盗み見たとき、私は、ドキリと、胸が高鳴るのを感じました。

木々を見つめる彼女は、どこか大人っぽくって、でも私が知ってる穂乃果らしいあどけなさを残した微笑みを浮かべていました。秋の優しい木漏れ日を受けて輝くその横顔は、息を飲むほど、美しい、と感じました。

「？どうしたの海未ちゃん？顔、赤いよ？」

「ふぇっ!?い、いえ、そんなこと……」

「うーん？どれどれ？」

そう言いながら、穂乃果は私の額に手を当てました。

「……うん。熱はないみたいだよ。でも無理しないでね？海未ちゃんが風邪引いたら悲しいもん」

そう言う穂乃果はいつもの優しい太陽みたいな笑顔を向けてきました。その瞬間、触れられた額が熱くなり、一気に熱が身体全体へと広がっていきました。

……それからのことはあまり覚えてません……。なんだかかなり生返事になっていた気がします。

そして、それからまったく穂乃果の顔を見ることができませんでした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

そして、現在何をしても集中出来ないことを真琴くんに告げました。何をしても、何故か穂乃果の顔がチラついて頭から離れなくなりました。

「私は、一体どうしてしまったのでしょうか……どうしたらいいのでしょうか……?」

「……あー、うん」

一通り話終えると、真琴くんは、とてもばつの悪そうな顔をしていました。重大な秘密を知ってしまったかのような、そんな表情でした。

「……あの、さ、海未。お前は、自分でどうしてそんな感じになったか心当たりはあるか?」

「いえ、分からないから困ってるんです」

「ああ、うん。だよなー。うーん……」

珍しく、彼は困り果てたように頭を抱えている。……一体、どうしたのでしょうか?

「……海未。多分だけど、お前のその変化の原因、分かったんだけどさ、知りたいか?」

……何故そんな不穏な言い方をするのですか?何か不味いことでもあるのでしょうか……。でも、正直、この感覚の正体を知りたい。でなければ、まともな作詞活動な

んてできません。
「お願いします。教えてください真琴くん。私は、一体どうしてしまったのですか？はっきりと、男子なのですからビシッと言ってください」
　そう言うと、真琴くんは物凄く言いづらそうな表情をしましたが、少しして、溜め息をついて、重い口を開きました。
「これは俺の主観でしかないんだけど、な？あー、海未。多分、お前……」

「穂乃果に恋、したんじゃないか？」

「……鯉？」
「ああ、うん、典型的なボケありがとう。でも違う。恋だよ。恋愛的な奴。ＬＯＶＥってやつ」
「れんあい？」

「そう」
「らぶ？」
「そう」

……

わたしが、ほのかに？
「おーい、休憩時間終わるぞ海未。もういい？」
その時、部長が私を呼びに来ました。その声に反応した私はスクッ！と立ち上がると、
「そ、そろそろ、いいいいかないと！まことくん、あああああありがとう、ございまし、た！」
「あ！おい、海未!?」
私は彼にタッパーを突き返し、そのまま脱兎の如く走り出しました。呼び止められましたが、もう、そんなことに構っていられません。私は、一秒でもその場に居られなくなっていました。
「あー、参ったなぁ。これ穂乃果になんて言えば。ってか、もう少しオブラートに包むべきだったか……あいつ大丈夫か？」

……その後、練習に戻りましたが、結果は散々なものだったのは、言うまでもありません……。

第２話「発覚～Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ～」

「♪きっと青春がきーこーえる！」
「♪そーの瞬間がみーたーいね！」
「♪隣にきーみーがーいーてー！」
「「♪うーれーしいけーしき！」」
「「♪隣はきーみーなーんだー！」」
「お前ら上機嫌だなぁ」

　海未と話をした翌日の放課後、ダンスの練習を終えたμ’ｓは休憩をしていた。今日はチーズケーキを焼いてきたが、どうやらお気に召したらしい凛と麗と花陽ちゃんは並んで座り、歌を口ずさみながら食べていた。……しかし、背の小さな二人の横で１９０ｃｍくらいの大男がテノールボイスで一緒に歌いながらチーズケーキを食べる姿は、物凄い違和感というかシュールさがあった。
「だってこのチーズケーキ美味しいにゃー！」
「滑らかな舌触り！濃厚なチーズの風味！優しい後味！どれをとってもパーフェクトです！」

「あんたはうるさい」
「うー！食べ過ぎないようにって思うんだけど、止まらないくらい美味しいです！」
　凛、麗、花陽ちゃんの順に感想を言われた。今日はちょっと寝坊したから時間がなくって大急ぎで作ったんだけど、どうやら上手くいったらしい。
「おい真琴」
「？　どうしました歩さん？」
「抹茶プリン　１４０ｋｃａｌ、アップルパイ　３０４ｋｃａｌ、杏仁豆腐　１３４ｋｃａｌ、チョコチップクッキー　４８８ｋｃａｌ、マーラーカオ　２８６ｋｃａｌで、先日のプチシュークリームの山…今言った食べ物とカロリー量、これが何か分かるか？」
「え、えっと、俺がこの１ヶ月作ってきたお菓子ですか？」
「そうだ、分かっているようだな……お前、前に海未に絞られたのを忘れたのか？」
「い、いや、それでも量とか考えてますし、今だって週一くらいの頻度ですし……」
「それでも十分多いぞ。それに、隠れて凛や花陽に作ってやったり、口車に乗せて他の連中にも色々食べさせてたりしてるだろ？」
「い、いやほら、練習の後ってお腹空くし、それにあいつらの物欲しそうな目を見たら作らないわけには……」
「甘やかすな馬鹿者！少しの体重変化でパフォーマンスに差が出るというのを分かって

いるにお前と言う奴は！」
「でも歩さん！僕もよく作ってもらいますが、特に変化はありませんよ！」
「お前の場合は身長と筋肉にいってるからだろ！お前じゃ比較対象にならないに決まってるだろ！」
　何時にも増して歩さんのお小言が飛ぶ。確かにライブ前だし体調管理は俺と歩さんの仕事だし、俺も分かってはいるけど、やっぱりあいつらのお菓子作って光線を浴びるとついつい作ってしまう。
「今回ばかりは歩の言うとおりよ！またＡ―ＲＩＺＥとライブすることになってんのよ？もっと自覚持ちなさいよ！凛達も！凛は太りにくいっていったって食べ過ぎよ！花陽もまたダイエットしたいの？ちょっとは考えなさい！」
「あうう、だ、ダイエットはもうやだよぅ……」
　プンプン！という効果音が聞こえそうな感じで一年生３人と俺を怒るにこちゃん。彼女の感情を表すように、チャームポイントのツインテールが激しく揺れる。
「えー!?そんなこと言ってこの間のプチシュー、にこちゃんのほうが一杯食べてたにゃーー！」
「うぐぐっ!?あ、あれは、その、残すのも勿体ないじゃない？それにあたしの場合食べれば食べただけパワーアップするっていうか」

「それなら凛だって一杯食べればもっと練習頑張れるにゃー！」
　大騒ぎしながら言い合いをするにこちゃんと凛。何と言うか、姉妹喧嘩のようだと思うと笑みがこぼれる。
「まぁまぁ、矢澤も間も落ち着けって。お前らちったぁ余裕ってもんが必要だぜ？ほれほれ、カルシウムとらねぇと心も身長も大きくならねぇぞ？」
「「身長は余計です（よ）！」」
　今度は浮竹先生がいつものニヤニヤ笑いを浮かべて二人のことを煽る。因みに先生は甘いのが苦手なのでブルーチーズケーキになっている。
「うわー、先生よくそんなの食べれるねー」
　穂乃果は信じられないと言った顔で、ブルーチーズケーキを食べる浮竹先生を見ていた。
「大人の味って奴だよ。あー、でもマジでこれ酒に合いそうだなぁ。剣持、まだこれあるか？」
「ありますよ。後で分けますね」
「おー、サンキュー」
「あ、うちも欲しいなー。なんか美味しそうやし」
「私も。パパがブルーチーズ好きだから後で分けてね」

「分かった」

希さんと真姫もブルーチーズケーキを注文する。良かった。どうやら皆も気に入ってくれたらしい……歩さんの視線は相変わらず痛いけど……。

「でも本当、ビックリするくらい美味しいわよね。この間のプチシューなんて、5種類の味があって気が付いたら無くなってたわよね」

「しかも生地は米粉を使ってたからモチモチで……うう、また食べたくなって来ちゃった……」

「絵里さんも花陽ちゃんも、また今度作ってきますよ……も、勿論ライブ終わったらですけど……」

「凄いよねー。私もよく作ってくるけど、あんなに手の込んだの作れないよ。いつ作ってるの？」

「え？3時半くらいから起きて作れば余裕だろ？」

「……え？」

……あれ？なんかことりに引かれた気がする。な、何故？

「まったくあんた達は……海未もなんか言って」

「……」

にこちゃんが海未にも意見を求めるが、しかし海未は返事をせずケーキにも手を付

けないでボーっと遠い目をしている。

……今日1日観察してたけど、授業や練習は集中してたけど、暇があるとずっと上の空といった感じで、さっきも階段を踏み外しそうになっていた。眠そうにまばたきする時もあった。

……やっぱり、昨日のことが原因だろうなぁ。あー……こんなことならはっきり言わなきゃ良かった……。

「海未ちゃんどうしたの？具合悪い？」

「ふぇ!?ほ、ほの、穂乃果!?キャッ!?」

「おいおい！」

「キャッチしました！」

穂乃果に話しかけられた海未は顔を赤くして、すっとんきょうな声をあげながら後退りして、危うく転びかける海未。俺は素早く海未の後ろに回って支えて姿勢を正させ、麗が海未の落としたケーキの皿をズザザーッ！とヘッドスライディングしながらキャッチした。その海未はと言うと、何と言うか口をパクパクさせて固まっている。

「だ、大丈夫？本当に何かあったの？」

「イ、イエ、ナンデモナイデスヨ？」

「なんで片言？」

……本当に大丈夫かよこいつ……。余りの動揺っぷりに、他の皆も心配そうに集まってくる。
「どうしたのよ海未？熱でもあるの？」
「よく見たら顔赤いじゃない！休んだほうがいいわ」
「い、いえ、大丈夫です！ほら、こんなに元気です！」
にこちゃんと絵里さんが心配してるが、とうの海未は腕立てをして自分の健康をアピールしている。
……でもそんな漫画だったらグルグル目してる感じの奴が元気なようには到底見えないけどな。
他の皆も、海未の体調を心配して休ませようとするが、海未は大丈夫ですの一点張りだ。
「強情ね。麗！強引だけど力ずくで保健室に連れて行きなさい！」
「分かりました！ご安心ください海未さん！体調が悪くて苦しいかもしれませんがもう大丈夫です！保健室で休憩すればすぐに元気になれます！いざ！保健室へ！」
「あ、じゃあ私も付いてくね」
「私も行くわ。何かあったら連絡するから」
「私も行くよ！」

「穂乃果、お前はダンスの振り付け確認あるからこのままここにいろ」
「わわわっ!?れ、麗！離しなさい！本当に大丈夫なんです！だから降ろしてください！って思ったより高い!?」
　にこちゃんの命令を聞いた麗は、海未をヒョイッ！と横抱きにして保健室へと連行する。海未もまだ抵抗するが、意外な高さと麗（バカ）の筋肉の壁で阻まれて脱出できないらしい。ことりと真姫もいるみたいだし、まあ大丈夫か。麗一人で行かせると、海未が不治の病にでもかかったかのように学校全体に伝わってしまうからな。それくらいあの馬鹿の言い回しと声のでかさは凄いってことだけど。
「海未ちゃん大丈夫かにゃー？」
「ちょっと心配だね」
「ちょっと様子変やったしなー」
「また作詞で行き詰まってるのかしら」
「いや、そんな感じではなかったが……」
「ことりと真姫ちゃんがいるし、大丈夫だと思うけど……」
　皆、麗に連れ去られる海未のことを心配する。まあ、あんな調子じゃなぁ。
「ねぇ、まこくん。昨日のこと、海未ちゃんにきいてくれた？」
　皆の意識が逸れてるうちに、穂乃果がコソコソと小声で俺に話しかけてきた。昨日

のこととは、勿論、海未が穂乃果を避けてる理由のことだろう。

さて、どう言い訳したものか。当然、俺の口からあいつの想いを言うなんてことは出来ないし、かといって嘘を伝えても変に勘のいい穂乃果が納得するかどうか……。

「うん、聞いたぜ。ちょっと悩みがあったらしいんだ。俺も山勘でその悩みを当てようとしたんだけど、結局答えてくれなかった。その悩み事態、あいつ自身もあんま自覚できてなくって、なんか隠し事してるみたいでお前に合わせる顔がなかったんだってよ」

……我ながら苦しいな。物凄くぼやかした言い方しか方法が思い付かない。でも嘘は言ってない。実際、俺が言った海未の想いはまだ推測の域だし、あいつも答えを出してないし。

「ええっ!?海未ちゃん自身もよく分からない悩み?」

「ああ、こう、モヤモヤしてるらしいんだよ」

「そうなんだ。うーん、自分で分からない悩みなんて何だろう?」

「何って、そりゃ……」

「もしかして、恋の悩みじゃねぇ?」

「「うわっ!?」」

突然、俺と穂乃果の間に、浮竹先生がニヤニヤ顔で入ってくる。やべぇ、完ッ全に油断してた。

「おいお～い。コソコソ二人で何話してんだぁって思ったら恋バナかぁ？そんなおもし…重要な話、何でこの恋愛マスターのおっさんに相談しないんだよ剣持？」
「あんたは恋愛マスターじゃなくってただの軟派教師だろ。大体、恋の悩みって決まった訳じゃない……」
「先生！海未ちゃん、恋しちゃったの!?」
「おい穂乃果！」
「あったり前だろ？親友にも相談しづらくって自分でも答えが出しづらくってモヤモヤしてる……んー、恋煩いの症状だねぇ。おっさんには分かる」
「浮竹先生！」
　くそ！このエロ教師は！この人も勘が良いから言いたくなかったのに！そして、俺達の話は当然他の皆にも聞こえていて……。
「ええー！それホントせんせー！海未ちゃんだけ大人の階段登ってるってことにゃー!?」
「だ、駄目よ！アイドルは恋愛禁止なんだから！」
「そそそそうですよ！過去にも恋愛関係で解散したスクールアイドルもいたんですから！」
「えー？でも海未ちゃんだって女の子やし、恋愛は自由でええんやない？」

「うーん、これは本人を徹底的に問い詰めなくっちゃいけないわね」
「はぁ、先生、また適当なことを言ってこいつらを混乱させるのは止めてください」
　あるものは驚き、あるものは恋愛禁止を声高に叫び、あるものは面白がり、あるものは先生の推測に呆れ果てた表情をする。ああもう！こうなるのが嫌だったのに！
　結局、混乱が修まり、練習を再開したのはそれから３０分後の話だった。
　ゲシッ！
「うがっ!?〜〜〜！てめ、剣持……！何も足を踏みつけなくても良いだろ……！」
「あんたが悪いんだからな！」

☆☆☆☆☆☆☆☆★★★

【ｓｉｄｅ：海未】
「海未さん、本当に大丈夫なのですか!?具合が悪いのでしたらすぐに救急車を手配しますよ！」
「あんたは飛躍しすぎ。一応熱がないみたいだけど、ちょっと休んだほうが良いわ。なんか寝不足って感じだし」
「今日ずっと眠そうだったしね」
「うう、すいません……」
　保健室に運ばれた私は、養護教諭の先生から寝不足と診断され、ベッドに寝かせら

れました。
　終始、私の容態をまるで不治の病にでもなったかのような心配そうな表情で見守る麗が、若干五月蝿かったですが、それだけ心配させてしまうほどに、私は動揺していたみたいですね。
「とりあえず今日は休んだほうがいいわ。いくらライブが近いって言っても、コンディションが悪くちゃ意味ないもの。先生も別の用事でどっか行ったし、ちょっと寝てったら？」
「でしたらこの、飛鳥　麗にお任せください！海未さんが安らかに眠れるよう、僭越ながら僕が子守唄を歌わせていただきます！Ｔｗｉｎｋｌｅ　Ｔｗｉｎｋｌｅ　Ｌｉｔｔｌｅ　Ｓｔａｒ……「五月蝿い」（ゴスッ！）おごっ!?ま、真姫くん……君の肘鉄……日に日に強力になってないか……!?」
「あんたが毎度毎度バカやってるからでしょ」
　みぞおちに真姫の肘鉄を受けて悶絶する麗。
　確かに発音も完璧だし良く通るテノールの美声な歌声だけど、正直身ぶり手振りが五月蝿すぎて絶対眠れないなと感じるレベルでした。気持ちは本当に有り難いのですが、基本、万事全力全開な彼は子守唄を歌うのに向かないと思います。
「じゃあ私、保健の先生が戻るまで残ってるね。二人は練習に戻って大丈夫だよ」

「分かったわ。他の皆にも伝えておくわ。行くわよ」
「では海未さん、ことりさん！失礼いたします！」
「すいません、後はお願いします……」
　真姫と麗を練習に戻るため、保健室を後にした。後には私とことりだけが残った。
「ねえ、それで何があったの？海未ちゃん」
「え？」
　二人が居なくなった途端、ことりがそう問いかけてきた。
「最近海未ちゃん、何だか様子変だったし。今日は特に変だったけど」
「うぐぐ……」
　ま、まさかことりにまで気付かれていたなんて……そんなに分かりやすいのでしょうか？
「だ、大丈夫ですよことり。ちょっと最近作詞のほうが上手くいかなくってそれで悩んでると言いますか……」
「本当に？」
　その時、ちょっと前屈みになって目線を合わせて小首を傾げることり。
　あ、これはまずい、と長年一緒に居る経験則から、危険信号が脳内に鳴り響く。しかし、一歩遅かったみたいです……。

「海未ちゃん、私に本当のこと、教えて？ダメ？」
……気付いたら私は、ことりに全部話していました……。
「そうだったんだ。だからなんか穂乃果ちゃんのこと避けてるみたいだったんだ」
「あうう……」
全て打ち明けた後、ことりは少し驚いたようでしたが、私の方は、もう顔が燃えてしまいそうなほどに熱くなっているのを感じて、思わず布団を被って丸まってしまいました……。
「そっかー。海未ちゃん、穂乃果ちゃんのこと好きだったんだね」
「はうう……！」
昨日真琴くんにはっきり言われた時もそうですが、もう本ッ当に穴があったら自分から飛び込みたいほどに恥ずかしい！ううう……！
「……うん！決めた！」
「えっ？」
その時、唐突にことりがそう宣言した。え、何を決めたんでしょうか？そのことりは、にっこりと笑みを浮かべています。
……嫌な予感がします。
「海未ちゃん、穂乃果ちゃんに告白しよう！」

「え」
「私がお手伝いするから！目指せ！ラブラブカップル！」
「え……えええええええ!?」
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★
「という訳で手伝って、まこくん！」
「……マジで？」
夜になり、夕食の準備をしていたらことりから突然電話が掛かってきた。
話を聞くと、どうやらことりも海未の想いを知ったらしい。そして、海未の告白を手伝ってくれと言われた。
正直完全に予想外の提案に、ハンバーグを少し焼き過ぎてしまった。
「お、おいことり……」
「もうプランは決まってるから、まこくんには海未ちゃん達が二人きりになれるようにしてほしいんだ。早速明日決行だよ！」
「え!?明日!?」
「本当は今日にでも行って欲しかったんだけど、海未ちゃんが無理って言って駄目だったんだー。だから明日こそ告白させないと！」
「いや待てって！いくらなんでも早急すぎじゃ……」

「じゃあ詳しい話はまた明日！よろしくね♪」

「いや、だから待っ（ブツッ、ツー、ツー、ツー）……切りやがった……」

ことりは、一方的にまくし立てるように言うと、さっさと切ってしまった。……何なんだ一体？ことりのやつ、一体何を考えてるんだ？

それにしても、ことりのやつ、何だか変な感じだったが……気のせいなのか？

……考えても仕方ない。とにかく、明日ことりの話を聞こう。告白の手伝いなんて……一体何をするんだか……。

――俺は、この時感じてた違和感について、もっと考えておけば良かった。この時、いや、もう既に、あいつらの運命は歪に狂い始めてたのかもしれない――。

――誰も知らない、誰にも知られてはならない、狂い捻れる、病める少女達の物語が始まる――。

第3話「塔〜Ｔｏｗｅｒ〜」

ことりから、海未の告白の手伝いをしてほしいと言われた、その翌日の放課後。
ついに海未のの告白を手伝うことになった。
「遅いよ二人ともー！」
「す、すいません」
「俺がちょっと頼まれ事をされてて、悪かった」
「もう！今日はことりちゃんの衣装作りの手伝いで行くんだよ？気合いいれてかなくちゃ！」
「でも二人とも待ち合わせ時間までに来たんだし良いんじゃないかな？」
プンプンと遅れてきた俺と海未を怒る穂乃果とそれを宥めることり、そして、モジモジと顔を赤くしながら伏せている海未。いつもと怒る役と怒られる役が逆転しているが、自分のことでいっぱいいっぱいな海未は特にツッコむことはなかった。
ことりが提案してきた今回の告白の作戦は、実に単純なことで、穂乃果と海未を二人きりにして、放課後デートを行うというものだった。
今回ことりは、皆には衣装につける小物を俺達二年生で探すという名目で練習から

抜けてきた。といっても、その衣装のほうは俺やヒフミトリオ、にこちゃんが手伝ったから８割くらい完成しているらしい。なので小物探しというのは、ただの口実で、穂乃果と海未を二人きりにするための嘘という訳だ。

「クンクン……何だか良い香りがしない？」

「え!?そそそ、そうでしょうか？わ、私は何も……」

流石穂乃果。やはり気付いたか。実は俺達が遅れたのは、俺が先生に頼まれて授業に使う資料を片付けてたというだけでなく、海未のメイクもしていたからだ。

今回はあからさまな感じにせず、ほんの少しリップやチークなどで手を加えて、ごく自然に、しかし表情次第では大人っぽく見えるようにした。穂乃果の感じた香りは、軽く柑橘系のコロンを振ったからだ。やっぱり、突然メイクを頼まれた時のために化粧道具一式を常備してて正解だったな。

「そ、それはともかく！早速行きましょう！早く行かないとお店が閉まりますよ！」

「おー！」

「可愛いのあるといいね♪」

普段しないメイクやこれから穂乃果とデートするということに未だにテンパってる海未が、強引に出発を宣言する。大丈夫かよ海未のやつ……。

……俺は、幾分か不安を感じながら３人に付いていくことにした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

【ｓｉｄｅ：海未】

私は今、緊張の極致にありました。

昨日、突然ことりに言い渡された今回の計画。穂乃果とで、デートをして、そ、そそそして、穂乃果にこここ、告……ハ……ク……を！するという計画を！

そして今、私は秋葉原でことりと真琴くんと別れ、穂乃果と二人きり、そう、二・人・き・り！になってしまったのです！

余りの緊張に、もう何軒かアクセサリーショップや洋服屋さん、スクールアイドルショップにも立ち寄ってるはずなんですが、まったく記憶がありません！

そんな私を気遣って、穂乃果がハンバーガーショップに立ち寄って、席に着いていました。とても目の前にあるハンバーガーに手を出せる心境ではありませんが……。

「ねぇ、海未ちゃん」

私はもうパニックを起こしていました。果たしてこ、コクハクとは一体どのようにするのが作法なのでしょうか？そもそもこの状況はデートなのでしょうか？本当にしなければならないことなのでしょうか？二人は隠れて付いてきいると言ってましたが

本当でしょうか？

「海未ちゃん？」

もう思考がさっきから二転三転してまったくまとまりません。

ああ、もうどうすれば!?

「海未ちゃん！」

「うぁひゃい!?」

混乱していた私は、対面に座っていた穂乃果の顔が間近にあるのを見て、変な声をあげてしまいました。

「もう、何度も声掛けたのに返事してくれないから心配したよ」

「す、すいません……」

どうやら声を掛けられていたのにまったく気付けていなかったみたいです。余りにも余裕がなく、穂乃果に心配をかけたことに自己嫌悪の溜め息が出てしまいます。

「海未ちゃん、何か悩んでる？ずっと考え事してるみたいだけど」

「い、いえ、大したことじゃないんですよ？だから心配しないで……キャッ!?」

動揺していた私は、コーラが入っていたカップを倒してしまいました。じわーっと

コーラがテーブル全体に広がっていきます。
「わわわ！海未ちゃん大丈夫!?」
「だ、大、丈、夫、です！」
慌ててティッシュでコーラを拭き取りながら、何時もならしないような失態を犯してしまったこと、そして周りの視線が気になってしまって、羞恥で顔から湯気が出そうでした。もはやパンク寸前の私。そんな私を見て、
「……ねぇ海未ちゃん、私ね、海未の味方だよ」
「え？」
一緒にティッシュでコーラを拭き取っていた穂乃果が唐突にそう言ってきました。いつも浮かべている、太陽を思わせる笑顔の穂乃果。でもそれは、春の木漏れ日のように優しく包むような、そんな笑顔で穂乃果は私を見つめていました。
「海未ちゃん、最近なんか考え事してるよね。でも何に悩んでるとか、私、馬鹿だから分かんないし、力になれないかもしれない。でもね、海未ちゃんが困ってるなら、私も一緒に考えたい！海未ちゃんがやりたい事があるなら私も手伝うよ！」
「穂乃果……」
「だから、何か悩んでるなら、言ってほしいよ。最近の海未ちゃん、ちょっと変だもん」
ああ、なんて……なんて真っ直ぐな瞳なんでしょう。その瞳の光が、彼女が言って

いることに、一切の嘘がないと確信させてくれます。
ずっと、真琴くんに私自身が気付いていなかった私自身の想いを言い当てられた日の夜から、考えていました。
私は、穂乃果の何処が好きになったのか。
そしてその答えは、私は、穂乃果の全てが好きなんだと言うことでした。
私を信頼して、真っ直ぐに見つめるこの目が好きです。
私の手を引いて、引っ張ってくれるこの手が好きです。
私に勇気と活力を分け与えてくれるこの声が好きです。
私のこの想いを告げたら、穂乃果はどのような反応を返してくれるのでしょうか……そう思うと、怖くもあり、同時に……もし受け入れてくれるのなら……と考えてしまいます。
「穂乃果」
「？」
「私は……」

「穂乃果のことが、好きです」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

『穂乃果のことが、好きです』

テーブルに置かれた携帯から、海未の、意を決したような声が聞こえてきた。俺は意外に思いながらも、身を乗り出して、携帯の声に耳を澄ませた。

俺とことりは、二人と別れたふりをして、後をつけていた。

終始、変な動きをしていた海未は、普段なら写真でも撮って後でからかうところだが、流石に自重した。

因みに、何故ことりの携帯から海未の声が聞こえるのかというと、なんてことはない。通話状態の俺の携帯を海未の鞄に忍ばせて、盗聴機代わりにしてるだけだ。

『へ？どうしたのいきなり？』

『あう……いえ、その、私は最近、ちょっと自分のことで一杯一杯だったんです。なのに穂乃果はいつも、そんな私の事を考えてくれて、支えてくれて、そのおかげで今の私があるんだなって思ったんです。……まだ、私自身も、その悩みに答えを出せないでいるんです。それでもその……よ、良ければ今後も……ずっと側で一緒に……居て……くれ……ますか？』

……あの海未がこんな台詞をスラスラと言うなんて……。いや、これが本当の海未

の気持ちなんだな。それほど、穂乃果に対する想いは強いってことか。
　いつも、こう言ったことに関しては恥ずかしがる海未の、その本音に、俺は少なからず衝撃のようなものを感じていた。そして、その想いを告げられた穂乃果は……
。
『良かった～！』
『え？』
　まさかの安堵の溜め息だった。
『最近海未ちゃんに避けられてる気がして、もしかしたら何か怒らせるようなことして嫌われちゃったのかと思ってたんだよ？』
『そ、そうだったんですか？』
『そうだよー！まこくんにも相談したんだけど、全然原因が分からなくって、でも違うんだよね？』
『は、はい。私は、穂乃果とずっと、ずっと一緒にいたいんです！だから嫌いになんて……！』
『エへへへ。ありがとう、海未ちゃん。うん、ずーっと一緒だよ！』
『ほ、本当ですか!?』

『うん！だって海未ちゃんは、私の親友だもん！』
『……』
『？　海未ちゃん？』
『……いえ、何でもないです……』
……携帯から、海未の疲れたような溜め息が僅かに聞こえてきた。まあ、これはしょうがない。相手はあの穂乃果だからな。何より、普通は友情的な好きだと思うだろうし。
『ねぇねぇ、海未ちゃん。それでその悩み事ってなんなの？何かあったの？』
『ええ!?い、いえ、えっと……』
『稔先生が恋の悩みじゃないかって言ってたよ？』
『な、なな!?そ、それはその!?』
『えー！教えてよー！』
携帯越しに、二人がいつも通り仲良くじゃれている声が聞こえてくる。微笑ましい二人のやり取りに思わず頬が緩むのを感じた。
「むー、残念。せっかく海未ちゃんが勇気を振り絞ったのにね」
そう言いながら、こくこくとレモンティーを飲むことり。穂乃果の反応に困ったようにその形のよい眉を八の字にして苦笑いを浮かべている。……ただ、俺にはどこか

ホッとしたような表情に見える気がする。
　さっき、海未の告白が携帯から聞こえてきた時、ことりが小さく息を飲むのを見た。
　昨日から、ずっと違和感を感じていた。よく分からないが、ことりはどこか余裕がないように思えた。何か急いでいる。そう感じてしまう。
「……ことり、聞いていいか？」
「　？　なぁに？」
「何で海未の手伝いをしようって思ったんだ？」
　俺は、ずっと思っていた疑問をぶつける。すると、ことりはんー、と小首を傾げたあと、
「そんなに変なことかな？友達の応援をするのって」
「いや、変じゃねぇよ。実際、俺も片棒担いでるわけだしな」
「でしょ？普通のことだよ。……それにね、海未ちゃんが穂乃果のことを好きになる気持ち、分かるから」
「ことり……」
「穂乃果ちゃんはね、凄いんだよ。いつも私達の手を取って、『一緒に行こう！』って言ってくれるの。そしたら、手を引っ張って今まで見たことない景色を見せてくれるの。穂

乃果ちゃんに『絶対にできる』って言われたら、どんなことも出来る気がしてくるし、穂乃果ちゃんの目を見るだけで、心がポカポカしてきて、魔法をかけられたみたいに力が湧いてくるんだよ。それにね、穂乃果ちゃんは……」

……そんな風に、穂乃果の凄いところをあげていくことりの表情は何処までも楽しそうで、誇らしそうで、まるで想いが今にも溢れ出しそうな表情だった。

そう、今まさに、穂乃果の前に座る彼女が穂乃果の事を語った時のような、そんな表情を……。

同時に確信にも似たものを感じた。ずっと感じていた違和感の正体。

ことりの、穂乃果に対する想いを。

ことりの口から、湧水のようどんどん溢れる想いを聞いていて、俺は、何を思ったのか、言葉を漏らしてしまった。

「辛くないか？」

言った瞬間、自己嫌悪で舌を噛み千切りたくなる衝動に駆られた。実際、舌の端を思いっきり噛んで、口の中に鉄臭い味が広がる。

ことりはキョトンとした表情をしている。俺は

「ずっとレモンティーばっか飲んでるじゃねぇか。腹、減ってなかったのかなって思っ

てよ。悪いな、こんな一杯セットで頼んで」
「え？ううん、大丈夫だよ、気にしないで。でも本当に多いね。後で持って帰れるかな？」
「どうだろうな。流石に分かんないな」
……我ながら、なんて苦しい言い訳だ……。
俺は、どこまで馬鹿なんだ！もし、俺の推測が当たっているなら、俺の今の発言はとてつもなく無責任なものだ。ことりがどんな思いで今いるのか、考えれば分かりそうなものなのに。俺は、最低だ。
『よーし！じゃあ次のお店に行こう！』
『ええ、行きましょう！』
「……俺達も行こうぜ」
「うん、行こっか」
穂乃果達は移動するようだ。俺はことりに声をかけて、二人の尾行を続けることにした。
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★
結局のところ、海未はその後、告白をし直すことはなかった。
まあ、本人は吹っ切れたのかなんなのか、かなり上機嫌な様子だ。ことりの方は、あ

の後、何か言うでもなく、そのまま解散となった。
「なあ、智佳（ちか）、麗火（らいか）」
「んー？」
「なんだ？」
「俺がお前らのこと好きっていったらどう思う？」
「きも」
「通報しますた」
「お前らなぁ……」
　翌日の昼休み。俺は、悪友の智佳と麗火なんとなくそんな質問をしてみた。予想通りの返答だった。
「んだよいきなり、キモいぞまこ。それともそう言うカミングアウトかよ」
「んな訳ねぇだろ、そうだとしてもお前みたいな中途半端デブにはしねぇよ」
「誰がデブじゃ！ぽっちゃりだぽっちゃり！愛され豚まん系だ！訂正しろ！」
「知るか！てか自分で愛され系言うな腹立つ！」
　スマホでリズムゲーをしながら俺と言い争いをする辺り、麗火は本当に器用だ。まったく尊敬出来ないけれど。
「……また変なことに首突っ込んでんのか？」

「そんなんじゃねぇよ。別に変なことなんて」
「でも首は突っ込んでる」
　机の上で胡座をかきながらジャリジャリ君をかじりながら、智佳は断言した。
　……やっぱり保育園からの腐れ縁というのは、馬鹿に出来ないらしい。
　麗火も、智佳と同じように俺が何かに首を突っ込んでいることを察してるのか、スマホから少し顔をあげて俺が事情を話すのを待っている。
「あー、実はな……」
　俺はあの３人のことをＡＢＣと仮称して、所々ぼかして二人に事情を説明した。
「んー、つまりお前は、そのＣが身を引くのが納得いかないってことか？」
「……まあ、そう言うことだな」
「何でだ？だってお前、そのＣがわざわざデートをセッティングしたんだろ？つーことは、もう諦めてるってことだろ？」
「そもそも、お前は部外者」
「そうそう。第一お前、只でさえ恋愛のれの字もねぇような奴が首突っ込んでいい案件なのかよ？」
「中学時代に、その恋愛経験のない俺が『恋愛相談すれば告白を１００％成功させるキューピッド』っていう噂を学校中に広めたのは何処のどいつだったよ？」

「そう言いながらマジで成功させる変態はどいつだったかな？」
「私だ」
「いいや私だ」
「「お前じゃねぇだろ」」
　と、まあどうでもいいコントはともかく、確かに二人の言う通り、俺は今回の件に関しては部外者という他ない。正直、俺が何か言ってどうなるというもんじゃないというのは分かる。でも……。
「……何とか、してやれないのか？」
「あ？」
「そりゃ部外者なのは分かってるし、無駄に引っ掻きまわすことになるかもしれないけどよ……このままだと、３人の関係がどんどん変わってって、何か、取り返しのつかないことになる気がするんだ。だから、何か３人が納得できる答えにたどり着けるように、俺にも出来ることがあるんじゃないかって……」
　今は、まったく何も思い付かない。でも何かしなければ、あの３人はバラバラになってしまう、３人が笑って過ごすことが出来なくなるという不安が、俺の中で渦巻いていた。ことりのあの態度を見るたびに、その不安が大きくなるのを昨日から感じていた。

「だとしても、今は静観するっきゃないでしょ」
「……麗火、お前俺の話を……」
「聞いてたよ。けど、ウダウダ考えても時間の無駄だろ。んなことする暇があるなら、μ’ｓのライブの準備でもしたらどうだ？また近いうちにやるんだろ？」
「それは……（ゲシッ！）いってぇ！てめ、智佳！」
　麗火の最もな意見にまだ納得出来ない俺の後頭部に突然智佳が蹴りを入れてきた。
俺は思わず文句を言おうと立ち上がるが、
「下手な考え休むに似たり」
「は？」
「だな。智佳の言う通り、考えても仕方ないもんは仕方ねぇんだよ。信じりゃ良いのさ、その３人を。もしかしたら、杞憂かもしれねぇぞ？だってその３人は親友同士なんだろ？今から焦ってもしょうがねえさ」
「……」
「まっ、何かあったらお前はすっ飛んでいくだろ？目の前に困ったやつがいたら全力で助けにいく。それがお前だろ、まこ」
「……ああ」
　麗火の言う通り、もしあいつらに何かあれば、俺は全力であいつらを助けにいく。

それが、俺がマネージャーとしてあいつらの側にいる理由であり、俺自身が決めたことだからだ。

……そうだ。今はその時じゃない。もし、本当に大変な時は、あいつら自身が助けを呼ぶもんな。それに俺だけじゃない。あいつら3人の周りには、絵里さんに希さん、にこちゃんや真姫、花陽ちゃんに凛も付いているんだ。

信じるんだ、穂乃果達を。穂乃果達の絆を。

「しかし、お前ずいぶんその3人の肩を持つな?……はっはーん、さてはお前?その3人の中の誰かが……」

「好きなのか?」

「当たり前だろ?」

俺はμ’ｓのマネージャーだ。あいつらのことが好きなのは当然のことだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

【ｓｉｄｅ：希】

「……何これ……?」

その日、何となくうちは占いをすることにした。

占いの対象は海未ちゃん。一昨日くらいに先生が冗談で海未ちゃんが恋煩いをしているなんて言っててそれが気になって軽い気持ちで何時もの要領で占いを始めた。

……そしたら、

「また、このカード……」

何度も何度も、繰り返しタロットを引き直しても、現れる同じカード。しかも不気味なことに、そのカードは海未ちゃんだけでなく、試しに他のμ’ｓのメンバーを占った時に穂乃果ちゃんとことりちゃんの時に必ずと言って良いほど現れた。

……そのカードに描かれていたのは、「塔」のアルカナ。

「破滅」を意味する、最悪のカードだった。

第４話「笑顔～Ｅｘｐｒｅｓｓｉｏｎｌｅｓｓ～」

「なんか海未ちゃん調子良いにゃー。何かあったの？」
「え？そ、そうでしょうか？」
　ダンス練習の休憩の時、凛が海未に話しかけてきた。凛の言うとおり、今日の海未は調子が良い。さっきもストレッチ中に小さな鼻歌が聞こえてきたくらいだ。
「そうね。今日のダンスも、いつもより自信が溢れてる感じで良かったわよね」
「い、いえ、特に何かあったわけでは……」
「そういえば、何だかいつもと雰囲気が違わない？気のせいかしら？」
「うん、何だか綺麗になったっていうか、もしかしてメイクとかしてる？」
「ま、真姫や花陽まで何を言って……ってにこ？どうしました？」
「クンクン……海未、あんた香水使ってる？」
「！　そ、それは……！」
「クンクン、本当やね。なんかええ匂いがするよ」
「ちょ、ちょっと希！やめてください！」
「どれどれー？わぁ！良い匂い！海未ちゃんいつの間に香水なんて買ったの？」

「メイクも前は私におまかせだったのにねー」
「あわわ、ほ、穂乃果は少し離れてください！こ、ことりもからかわないでください！」
　凛の言葉をきっかけに一人また一人と皆が海未の周りに集まって騒ぎ始めた。やっぱり皆年頃ということもあってメイクには敏感らしい。
「じ、実はその……す、スクールアイドルですし、ちょっとおしゃれにも気をつけてみようかと、思い、まして……に、似合いませんか？」
「ううん！とっても綺麗になってるよ！」
「はぅ！……そ、そうですか？」
　穂乃果から笑顔で言われて、顔を真っ赤にして照れる海未。……本当の理由は、穂乃果に少しでも意識して欲しいということだった。
　昨日の昼休み、メールで俺を部室に呼んだ海未は、俺にメイクの仕方を教えて欲しいと言ってきた。あまりに唐突で予想外なことで聞き間違えじゃないかと思ってしまった。しかし海未の目は本気だった。顔を赤くして、らしくないと分かってると言うようなことも呟いていた。
『分かってるんです。でも、どうしてもこの思いを繋げたいんです。……力を貸してください、真琴くん』
　……そんな風に頭を下げられたら断れる筈もなく（元々断る気もないけど）、俺は簡

単だが海未にメイクを教えることにした。海未は俺の教えたことを一言も聞き漏らさないと言わんばかりの集中力でメモし、分からないところは質問してきた。そして今日、実際に朝からメイクをしているという訳だ。

「……本来なら、学校で化粧など説教ものだが……まぁ、練習くらいなら別に良いか……？」

「ええ！女性が美しくなることはとても良いことです！何より僕は海未さんの更なる上を目指す向上心！次のライブへの熱い情熱を感じます！これなら必ず次のライブも大成功ですね！」

「うーん、そうかぁ？確かに情熱だろうけどよぉ、これは……やっぱ恋でもしたのかっってぇ！いってぇ！何で今足を踏んできたんだ剣持！」

「すいません、でかいムカデがいたんでっい」

「嘘つけ！だったらグリグリすんのやめろてめえ！」

「はーい」

「お前、ホンット俺の扱いだけテキトーだよなぁ……」

俺が偶然を装って稔先生の足を踏み潰しいると、ふと視線を感じた。視線の方向を見ると希さんと目があった。といっても希さんは海未の周りにいる皆から一歩離れてこちらを横目でチラリと見ている感じだが、その目が何か気になることがあると語って

いた。俺はドリンクを持って希さんに近付いた。
「希さん、どうぞ」
「あ、ありがとー」
「……何か、気になることでもありましたか？」
　単刀直入に聞くと、希さんは周囲を見る。他の皆はまだ海未を弄っていてこちらに気付いた様子はない。それを確認すると希さんは顎に指を当てながら、何か考えながらだからか、少し歯切れ悪く俺に質問してきた。
「あんな？大したことやないんやけど、穂乃果ちゃんやことりちゃん、海未ちゃんってなんか変わったことあった？」
「え？」
　俺はその質問に少なくない驚きを感じた。海未の変化はあからさまだし、メイク関連を教えられそうなのがことりやにこちゃん以外だと俺だけだし、海未のことを聞いてくるのは分かるが、穂乃果やことりのことを聞いてきた（それも俺に）というのは、流石に驚いた。
「……占いか何かであったんですか？」
「んー……うん、ちょっとね。あの３人に変化の兆し有りってカードが言ってたんよ」
「成る程…でもなんで俺に？」

「君も一枚噛んでるって、カードが言ってたんよ。それに本人達が本当に悩んでたら、聞いても誤魔化されかねないし」

そう言って希さんが取り出したのは、「悪魔」のタロットカードだった。……え？なんで悪魔が出たら俺が関係してるってことになるんだ？ちょっと納得いかないけど、まあ占いの結果とかそういうのじゃなくても、同学年だから希さんよりはあいつらに接する時間もあるからな。そりゃ俺に聞いてくるか。

それより気になるのが、希さんの表情だ。……何か嫌な予感でもあるのだろうか、いつもより表情が固く、笑顔もどこかぎこちない気がした。

でもまあ、やっぱり本当のこと言うわけにもいかないので、ここはぼかして伝えた方がいいな。

「……心境の変化みたいなのがあったらしいです。特に海未にあったらしくって、俺はその相談に乗ってたって感じです。あいつらの中では穂乃果から事情とか聞いたほうが良いと思いますよ。穂乃果が先に海未の異変に気付いて、相談してきたんです」

俺は希さんを安心させるため努めて明るく伝えた。勿論、嘘はついてない。が、対する希さんは、明らかに不満そうな顔を見せた。

「ふーん？そうなの？……ふーん……」

「え？あの、どうかしました？」

「んー、真琴君って嘘付くときって笑う癖があるんだって思っただけだよ？」
「え」
　マジでか。まさか誤魔化してるのを見破られるとは思わなかった。うーん、表情には常に気をつけてたつもりなんだけどなぁ。
「ま、ええわ。君が関わってて現在解決中なら、うちから言うことないしね。……ただ……」
「ただ？」
「気をつけてね。何気ない一言や行動が大きな間違いになるかもしれんから」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

【ｓｉｄｅ：海未】
　最近、創作意欲がどんどん出てきて、あっという間に次のライブで歌う歌の歌詞が完成しました。
　今の今まで悩んでいたのが嘘のようにスラスラと詞が頭に浮かんできて、思わず鼻歌を口ずさみたくなる気分でした。
　恐らく無意識に抑圧されていた、気付けていなかった私自身の思いをようやく認識

出来たからでしょうか？心が軽くなったというのは、こういうことなのですね。

放課後になって、体力トレーニングのためにいつもの神社に集合することになりました。

その前に、お手洗いを済ませようとした私に真琴くんが、「穂乃果を校門とこで待っててもらうから、二人でゆっくりこいよ」と言ってくれた。彼のことだから、本当に穂乃果を残して他の皆を先に誘導してくれてるのでしょう。

彼には本当に感謝しています。やはり持つべきは友人なのですね。

バルブを捻ると蛇口から水が出てくる。早く穂乃果のところに行きたいと逸る気持ちを抑えて、鏡に映る自分を確認すると、そこに映る自分が頬を緩めて楽しそうにしているのが見えました。頬に朱が差し、いつもより柔らかい表情が作れる気がします。実際に頬に手を当てると、熱っぽいような、でも心地よい温もりを感じます。穂乃果のことを考えただけで、周りに聞こえてるような気がするほどに大きく、しかし規則正しく動く胸元が、苦しくなりますが、その息苦しさすら、今は愛しい。

これが、これこそが……。

「えー!?それホント!?」

「ホントホント、小泉さんが話してたの聞いちゃったんだー」

会話の花を咲かせながらお手洗いに来た二人組の登場に、私は驚きの余り壁に張り

付くように顔を隠してしまいました。二人は私に気付かずに奥へと進んでいきました。

あ、危なかった。もしあと一瞬反応が遅れてたらこの緩んだ顔を見られるところでした。

にしても、今、小泉と、花陽の名字が呼ばれたような気が……。

「そっかー。あたし最近μ’ｓの影響でスクールアイドルのこと調べてたんだけど、まさかあのグループの子がねー」

「ねー。しかも彼氏作るってだけでも普通のアイドル並みに大騒ぎなのにおんなじグループの子となんてねぇ」

その言葉に、私は悪いとは思いつつも、注意深く二人組の会話に耳を傾けました。

……今、「同じグループの子」というワードが出たような……。

「でも前々からなんかそんな噂もあったんだって。元々幼馴染みで距離も近かったらしいんだよ。ファンもネタにしてたらしいけど、本当だって思ってなかったみたいだよ」

「ははぁ～、でもそれがバレて……て訳か～」

「ねー。それでも良い！ってファンもいたみたいだけど、本人達が耐えられなくって辞めちゃったんだって」

「ふーん？でもさー……

ぶっちゃけ女の子同士って、なんか気持ち悪くない？　」
「ええー？ちょっとあんたひどくない？」
「じゃああんた私が、『ずっと好きでした！付き合ってください！』って言ったらどうする？」
「ないわー」
「でしょー？ぶっちゃけどんな感じなんだろうね？そう言うのって」

……気付けば私は玄関に向けて駆け出していました。
違う。違う、違う。違う違う違う。
それは別のスクールアイドルの話で私じゃない。私のことじゃない。違う違う違う違う違う。私は違う。穂乃果は違う。私達のことじゃない。
違う違う違う。私達は、穂乃果は、私は！
『海未ちゃん！』
早く、穂乃果に会いたい。穂乃果、穂乃果の元に行きたい。

あの声を聞きたい。あの笑顔を見たい。あの目を見たい。

穂乃果、穂乃果、私は――――。

『ごめんね、海未ちゃん……私……』

違う！穂乃果はそんなこと、絶対に言わない筈！だって、だって私と穂乃果は……

私達は……、

ただの、「幼馴染み」でしか、「友達」でしかない……

いや、それはまだ分からない。私は自分の気持ちを自覚しました。そして、まだ答

えを出していません。これからなんです、これから、私は穂乃果のことを……！
それに、ことりや真琴くんが手伝ってくれる筈なんですから。だから……。
そしてようやく玄関に到着。靴を履き替え、急いで外に出て、校門の方を見ると——
——。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆★★★★

【ｓｉｄｅ：穂乃果】
（海未、玄関到着の数分前……）
「海未ちゃん、遅いなぁ」
私は校門に凭れ掛かりながら、お手洗いに行ってる海未ちゃんを待っていた。
他の皆は先にいつもの神社に向かってる筈。私も一緒に行こうかと思ったけどまこくんに、
「あいつ、まだちょっと悩んでるみたいだから、お前の方からも聞いてみてくれ」
って言われた。だからこうして校門で海未ちゃんを待つことにした。
でも遅いなぁ。私も一緒にお手洗いいったほうが良かったかなぁ。そんなことを考えながら、私は、ふと顔を上げて校門まで続く並木道を見た。
もう夕方に差し掛かり、建物の影に隠れた夕日が、名残惜しそうに紅い光を投げ掛

けて校門の並木道を照らしてる。そよそよと少し冷たいけど優しい風が葉っぱを揺らしてて、春の桜で一面のここも良いけど、葉が色を変えていくこの季節も、私は好き。

だって光を浴びて金色に光るこの道は、どこか私の知らない場所へと通じるトンネルのようにも見えるから。そんな「秋の表情」を見せる木々を見つめながら、私は鼻歌を歌っていると……。

「あの……」

不意に声をかけられた。

視線を木々から声の方向に向けると、そこには男の人が立ってた。多分、同い年くらいで、うちの学校の男子用制服とは違った紺色のブレザーを来ていた。別の学校の人かな？

「えっと、なんですか？」

「ああごめん、君、もしかしてμ’ｓの高坂穂乃果さん？」

「え!?なんで分かったんですか!?」

「そりゃ分かるよ。有名だし、何より俺、君のファンなんだ。いつも応援してるよ」

「本当ですか!?ありがとうございます！」

嬉しいなぁ！こんな風にファンの人が実際に声をかけてくれると頑張ってる甲斐があるなぁ。

ニコニコと笑っている彼は、更に続ける。
「ぼららら……僕らのＬＩＶＥ　君とのＬＩＦＥとかも好きなんだ。あの曲のＰＶ、もう何回も見たよ」
「うわぁー！嬉しいです！ありがとうございます！そう言ってくださって！」
「あははは、本当に元気だね穂乃果ちゃんは。ねぇ、俺、もっと穂乃果ちゃんと話したいんだけど、良いかな？ここじゃなんだし、どっかの」
「え？」
ニコニコと笑顔を作ってる彼はそんな提案をしてきた。正直に言えば私ももっと話したいしファンの人は大切にしたいけど……。
「ごめんなさい、これから練習なんです。だからまた今度……」
「良いじゃないか、少しの間なら」
ニコニコとした笑顔を浮かべながら、彼は少し語気を強めにそう言ってきた。
「大丈夫だよ。そんなに時間はとらないし、俺はもっと君と話したいんだ」
「えっと、嬉しいし私もそうしたいんですけど……」
「……なんでかな？少しくらいおしゃべりに付き合ってくれないのかな？」
「だ、だからそれは練習が……」
「ああ、だったら僕もその練習場所まで付いてくよ。いっつも神田明神で練習してるよ

ね？」
「え？なんでそれを……」
「そうだ、それが良い。そうと決まれば早速行こう穂乃果ちゃん」
　男の人は、一方的に捲し立てるように言うと、スッと手を差し伸べてきた。掌を上にして、まるで手招きしてるみたいに。
　なんでだろう。さっきまで頬を撫でるように吹いていた風が、ざわざわと煩くなってきて、背筋が風邪をひいたときみたいにゾクゾクする。風に揺られて、木々が耳障りなくらい唸ってて、さっきまで金色に輝いていた周りの景色が急に暗くなり始めた気がして……。
「どうしたの？早く、一緒に行こうよ」
　そう言ってゆっくり近付いてくる彼。ニコニコと笑っているのに、その目だけが、異様に輝いている。全身にねっとりとした気持ち悪い何かが張り付く感覚がして……。ここから走って行きたいのに、脚がその張り付くものに阻まれてるように動かない……。
　この人に手を取られたらどうなるんだろう？どこか、どこか知らないところに連れていかれるような、そんな予感だけがするのに、私は……。
　海未ちゃん、ことりちゃん、誰か、誰か助けて……。

「おい」

突然、静かな声が辺りに響いた途端、さっきまで煩かった風が、息を殺すように静まりかえった。
「っ!?痛っ！」
「なにしてるんだ?」
はっと驚いて男の人の肩を見ると、そこに手が置かれてて、男の人のブレザーがその手を中心に大きなシワを作ってるのが見えた。男の人がさっきまでの笑顔が嘘みた

いに顔をしかめている。
　肩に置かれた手から、何処から現れたのか、黒い人影の腕が伸びていた。男の人の後ろにいるからよく見えないけど、真っ黒な制服に、光を呑み込んでるみたいに艶のない黒い髪の下から、背筋が冷たくなるくらい鋭くて、黒い水晶玉みたいな光が尾を引いてるのが見えた。
「なぁ、なにしてるんだ、あんた」
　その黒い人影は、聞いただけで鳥肌が立つくらい温度のない、平坦な声で男の人に問い掛けていた。
　機械の声だって言われたら信じれそうなくらいその声は無機質で、でも、その声はこの数ヶ月で聞きなれた声で……。
「まこくん……」
　私がその名前を呼ぶと、黒水晶の光がほんの少し揺れた気がした。
　その瞬間、男の人は肩を掴む手を引き剥がして、後ろを振り向いた。文句を言おうとしたのか鼻息を荒げながら人影の方を見た男の人は、まるで石になったみたいにピタリと動かなくなって、うわごとみたいに人影の名前を呟いたのが聞こえた。
「剣持……真琴……？」
「　？　……お前は……」

「っっっ!」

バッ、と男の人はすぐに人影の横を通り抜けて走り出した。すぐに小さくなっていくその後ろ姿を、人影はジッと見つめ続けていた。しばらくして、男の人の姿は完全に消えて、後には私と……。

「……大丈夫か穂乃果!?」

心配そうに私の顔を覗きこんでくる、まこくんの姿が、私達のマネージャーの顔がそこにあった。

「怪我はないか? 何か今のやつにされなかったか?」

心配そうに私のことを見つめる黒い目が揺れている。

「え、あっ! だ、大丈夫だよ! 全然怪我とかしてないよ」

「……本当か?」

「うん! へーきへーき!」

「……良かった……」

そう言うと、ホッとしたのか、まこくんはふー、と息を吐いて膝に手を付いていた。私は彼を思わずじっと見てしまった。さっきまでなんだか凄く怖い雰囲気を出していたのは、本当に今、目の前で脱力している彼と同じ

人なのかな?

そう思ってしまうくらいまこくんの出す雰囲気はさっきまでと変わっていた。風も元通りにさわさわと優しく木を揺らしていて、まるでさっきまでのことが嘘みたいに……。

「……あれ？」

……どうしたんだろ？手が、震えていた。鳥肌が立っていて、自分の意思と関係なく小刻みに動いてる。

……なんで？

「……穂乃果」

そっと、私の震える手を、私よりずっと大きくて暖かい手が包み込んできた。お父さんの手を思い出す固くて厚い掌の感触。顔を上げると優しそうに目を細めて微笑む私達のマネージャーの顔があった。

「大丈夫だ、もう心配ないんだ。俺がいるから、俺がお前を守るから。だから、なんにも心配ないんだよ」

ポンポン、と今度は手を包み込んだまま、優しく叩いてきた。子供をあやすみたいな仕草で、なんだか恥ずかしいけど、優しいその言葉とその手の暖かさを感じて、次第に私の手の震えは治まっていた。

まこくんはそれを確認すると、すぐに手を離してくれた。もう、さっきまでの震え

はないみたい。
「……うん、もう大丈夫。ありがとうまこくん」
「いや、良かったよ。……なあ、海未はまだなのか？」
「え？あ、そう言えば……」
すっかり忘れてた。海未ちゃんを待ってたんだった。振り返って玄関の方を見ると、
「二人とも、お待たせしました！」
海未ちゃんがこっちに向かって小走りでやってきた。走ってきたからかな？ちょっと汗ばんでたけど、笑顔でやって来た。その海未ちゃんの姿を見て、もう私はさっきのことを完全に忘れることができた。
「もう！海未ちゃん遅いよー！」
「すいません。……それで、なんで真琴くんがここに？先に行ったのでは？」
「そりゃしんｐ……ごほん！ちょ、ちょっと自転車の修理頼まれてさ。それで残ってたんだよ」
そう言うと後ろから、「便利屋先輩ありがとうー！」という声とベルの音が聞こえた。見ると自転車に乗った生徒が二人、自転車を漕いで通りすぎて行くところだった。
「……相変わらず、頼まれたら断らないんですね、真琴くんは」

「そりゃあ困ってたら助けるのは普通のことだろ？」
　ちょっと呆れたように笑う海未ちゃんにまこくんは当たり前のこと聞くなよって顔をしてた。「……そうですか」とまた溜め息をついてる海未ちゃん。
　ってそうだ！
「それより二人とも、早く神社に行こうよ！時間！」
　時計を見て時間を見ると結構時間が過ぎていたみたいだった。二人も時計を見て驚いた表情をしていた。
「行きましょう！ダッシュで！」
「う、うん！絵里ちゃん達絶対待ってるよ～！」
「ああ！急げ急げ！」
　私達は大急ぎで走り出した。もうすぐライブだもん！今はすぐに練習しないと！私達は金色のトンネルを風のように通りすぎて、階段を降り始めた。

「……剣持真琴……なんでお前が……」